

マルショブ=ジャーナリズムのテッポウゲを利用した当局の団交中止の策動を粉碎し

無期限団交で收拾策動、試験を粉碎せよ！

於 237

法闘争委員会

教授の逃亡糾弾

1 一昨日(6月11日)、我々は法闘部学生部委員に、当日登校している教授全員の団交を申入れ、C名の教授に対してレポート制度について追求めた。この間の事情についてのサンデー新聞(12日朝刊)の「法学部の5人の教習が、法闘部闘争委員の学生数人につかまり、教養2号館内の教室に連れ込まれ……現更まで教室にかんづめにされたまま、外部との連絡が断たれている。」との報道は事実に反した、あくどいデマである。事実は、我々の申入れに基づき自発的に5名の教授が2号館に出向いてきたのであり、急用のため、黒田教授は途中から退席し、体調のおもわしくない格、牧田教授(牧教授は我々の直接の連絡要請に応じ途中からの出席)もその后帰宅し、レポート制に直接関係のある栗城教授、および石部教授、吉野教授(健康上、我々は帰宅を勧めた)と翌12日明後まで団交をした、というものであり、この間教室の出入を禁じたこともない。〈つかまり〉〈連れ込まれ〉〈かんづめにされる〉とはこんなことを言うのであろうか。ここでマスコミ批判と展開する気はないが、文斗委員の団交についての報道といい、〈真実〉の報道体でマル新の要諦は肌寒いものがある。かようなマル新にかような情報(?)を提示して「ある教授のソレ記者は直接取材にきておらず、情報源は教授と推定する」の責任も、かんづめ団交⇒折衝交渉導入のケースがしばしば見られるだけに、断固追求せねばならないであろう。

2 我々はこの団交の明後翌12日に登校する予定の(牧田)教授と1時から団交を継続することを確認した。ところが、時刻をすぎても我々の前に誰一人姿を見せないばかりか、学生部委員はじめ連日5級部員のはずの教授たちが全く登校し

ていなかったのである。ただちに調査したところ、自宅休養のはずの教授が不在だったり、我々と話合おうといっている教授も含む教授が某教授宅で会合をもっていたりしたことが判明した。これは明らかに約束の不履行であり、団交継続の一方的なボイコットである。「約束を守る」という最低限のモラルさえおさえぬ教授会を、我々は厳しく糾弾するとともに、今後、かかる教授の逃亡を許さないことを明らかにする。

闘争收拾〈レポート〉糾弾

1 一昨日の団交で、教養部運営委員黒田教授は「学生の提起している問題に答えて、大学改革の具体的な案が示されていない現段階では、学年末試験のかわりにレポート制をとることに反対である」と述べていることを明らかにした。

2 自らレポートテーマを提出している栗城教授は、以前、学生の提起した問題に答える姿勢の一端を示していない段階(4・7声明はそれを示していない)の試験再開には反対の旨、発言されている。そこで同教授は、レポート制は旧来の試験制度とは異なり、単純な旧来の日常性へ挫きとせるものではない、と繰返し強調された。しかし、我々の追求のまえに、自己の主観的解釈にもかわりわず、「今のレポート制は試験問題の根本的改革としてでべきものではなく」、「レポートと試験とはかなり違うが本質的に違わない」し、レポートによって旧学統において旧来の日常性に戻っていないとも言い切れない、と認めざるをえなかった。加えて、今回のレポートについて教養部運営委をさしおいて権限が教授会に集中している